

孫本甲城軍記三編  
九

3  
2258  
33





遠 13  
2258  
33

池  
清



繪本甲斐軍紀三編卷之九

目録

原隼人依暗み地理と知る事

同圖

佐々木多吉兵衛幼陣并天野鬼十郎の事

佐々木多昌幸守屋の事

天野勢放軍之圖

木曾左馬頭武田五郎参之事

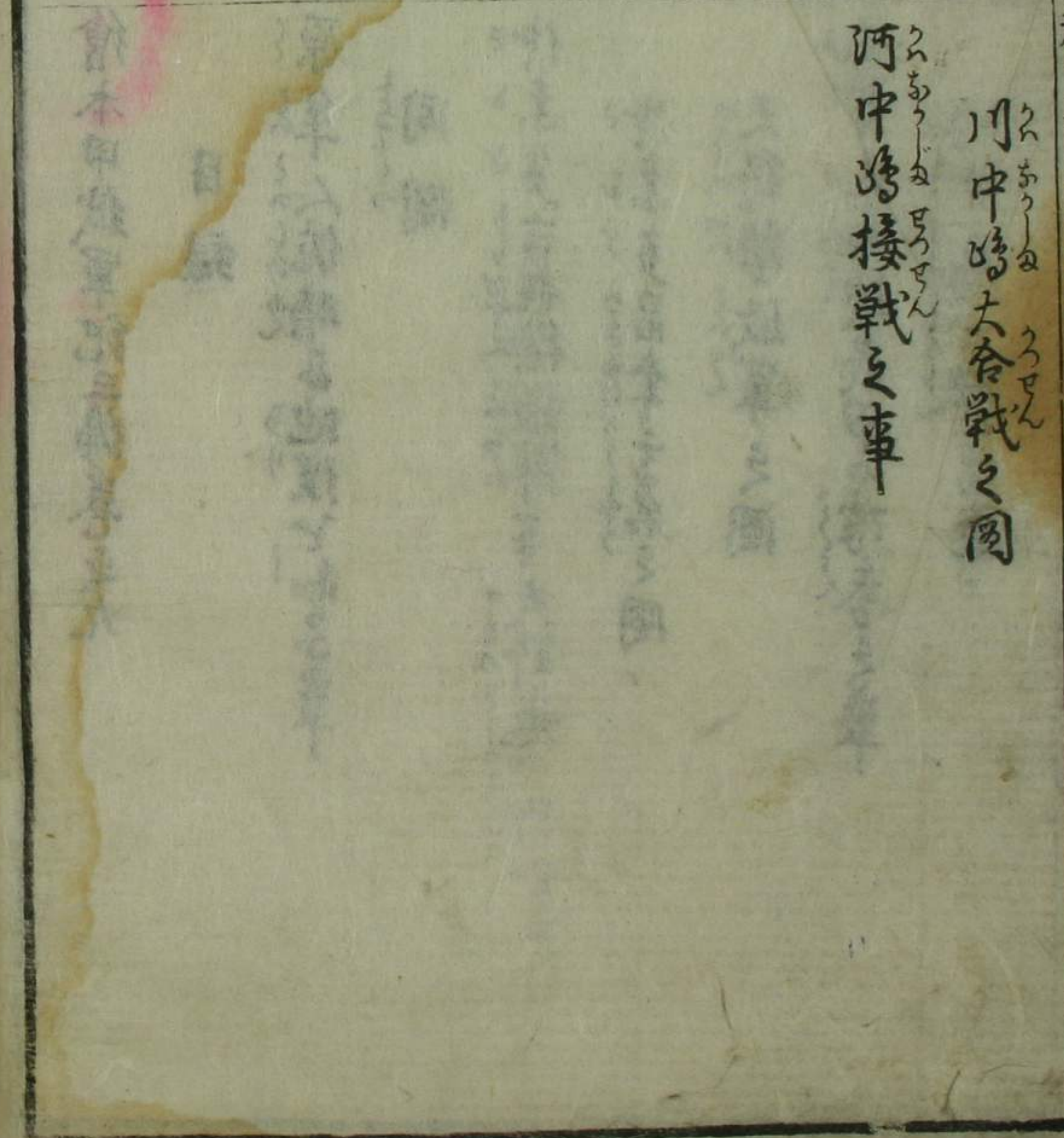
河内島出陣之事

日本書紀三編卷之九目録



河中崎大谷戦之図

河中崎接戦之車



繪本甲越軍記三編卷之九

原隼人傳暗又地理

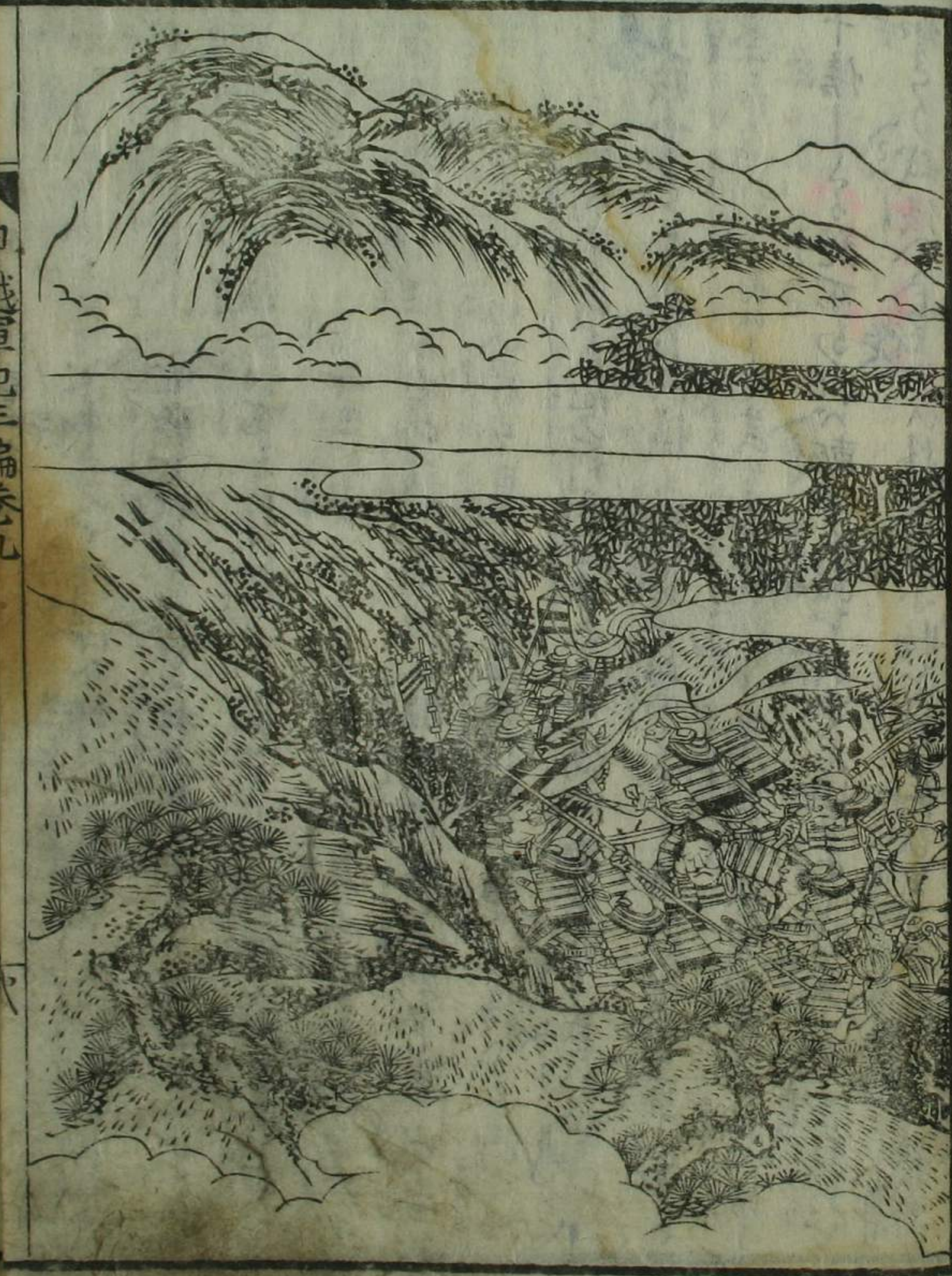
作本曾大馬頭源義昌も清和天皇八代の後胤常刀先生義賢  
 の嫡子朝日將軍伊豫守義仲が未流うて救代本曾と領一海  
 嶽の隈小住と其地山より宗續き盤石城として古松老拓生を  
 撫支ちりて人倫の通ふ道なく人殺と押へき地あり峻岨あり引  
 勇み士又是小籠更小武田が武威と恐れを覚りり時小天文二  
 十四年八月廿二日武田が先備其利を備門射る場民部が捕内藤終  
 理正系隼人傳喜日彈正忠福鳴口も武田を馬助飯富を部が捕同  
 三郎玄清長坂長岡栗系た玄清射市川宮内助傳喜日源を左衛門同  
 吉玄清小入道一徳齋後見と信玄も日向大和を諸南を後吉穴山



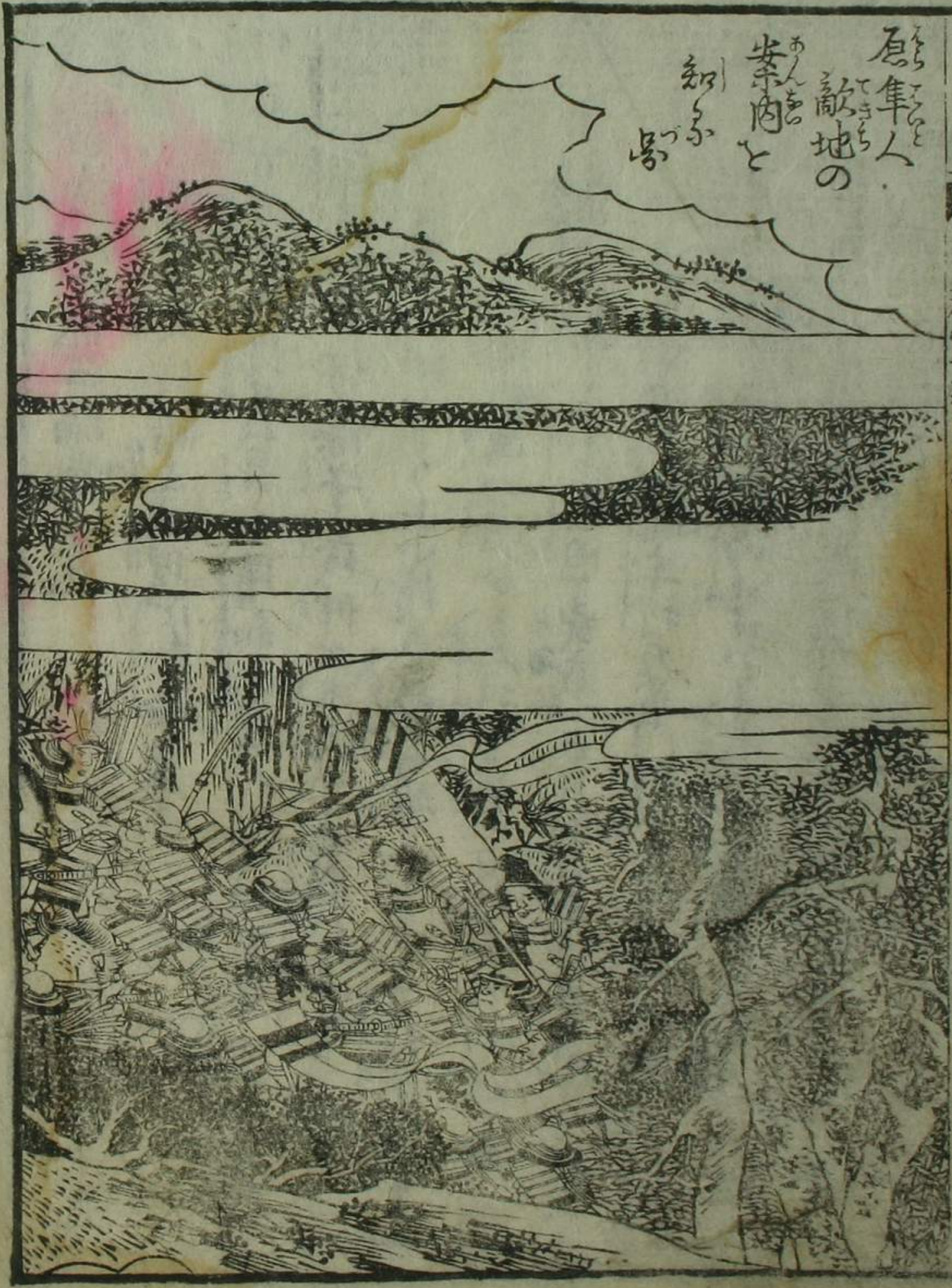
釣



甲越



原  
集  
人  
敵  
地  
の  
業  
肉  
と  
知  
り  
馬



甲越軍言三續卷ナ



託

伊豆守系加賀守と申して後陣小押孫ふ斯く先將其利を境  
 内藤系春日の惣檢難と凌り山奥に押入集るより道あり山中にて  
 東西より各入難に切而るれば如何とせん軍議區く小てら此に一變せ  
 び諸將死給言と出れば者あり多る而小系軍人進く出程源平  
 系戦は源義経一の岩の後に系孫小時業内者と我ら平山武者  
 不季重進及び君ら日本武名守田村將軍と申して後へる御代  
 あつ小此所はむつ地の利は屋敷ありし御間後思ひ九良の先勝  
 後戦おとろと承りれば儀と謙倉と申して御代をさし置るべき事あり  
 系子重地利と存ひして先小勝越と系此小本曾山一の岩の後に  
 十倍しる難ありしが輒く人数と押さ道はありて去るも其後  
 知まら戦後と申して後へる馬小物と独り烟ひ先は打ちあはれ各

信

678 あ

是小後にてお程小原軍人が洞は遠くは惣軍難く小本曾溝口の細水  
 及び越河嶽城近く進んでる作此軍人依るよりて遙の地裡に  
 貫通する事堂と指が如く奇郷ありてと軍人代が父加賀守の  
 後を甲州白畑の住人として武田家後代の士隊將小て信虎信玄二代  
 又仕へて武田名譽の士なり一年加賀守昌俊が身へ山伏と思き  
 者一人と申して旅舎とおび昌俊深に結んで對面し終夜諸國の  
 風俗と尋問式と武道の難状とあり又彼山伏が問答兵道孫兵  
 が奥秘を通し奇正得失と論じる事水の流るが如く山伏膝形の  
 城取と傳へし山中小於く道小迷ひる時其是死と奔へ山と隔  
 何方の地利と知る事とお傳へし何國ともあらずの昌俊不  
 儀小思ひ家人として其の方と足せりしも竟小知まれば又再びあ

勝

覺



勝

真田

鏡

車ふし勝の矩とら極意の深秘して其矩は徹通する者ぞ  
 二解し終れども其未だき傳と得ざる故に勝の形と以て家の  
 印と一わら黒地は白地勝一本は白地は黒地勝と付く大小の纏  
 とは隼人佐父が信玄継ぐ山中の地利と知りて今日嶮越の切木と  
 易くしとぞ越ゆるり子

代宗多吉と信初陣兵天野鬼十郎討死之事

斯く禍崎筋の寄る信怒の既留長坂栗原市川代宗多吉の勢も  
 越の切木と幸してお越り山嶽の城をく押寄圍と仰り後炮と歩  
 攻多ふ本宿方ゆり天野鬼十郎勝成切木小柵と結び究竟の討下手  
 旗と採り後炮のち番筒先と仰り教ぐ小お放しは是は武田が  
 軍勢回と向へさ招もかくお倒る若救あはたさ助是と見て尋る

真田

鏡

甲

武者して援援より通るし入ると妻付よ中下知の程よお槍の  
 武者依回新た槍の言本藏人諸部又去槍一處小馳出せばた馬助後の  
 旗本勢一度小咄と圍と仰り援援より生暮小突あふ栗原市川  
 代宗多吉も同時小圍と合せて攻多れと柵内より子後炮と兩の邊  
 へお出は小先は進し兵士百餘人の小成りお倒され依回新たの  
 言本藏人も疵と世あつゝ糸入事思ひも難くは攻は退はて物づく  
 息と健方る爰小長坂た槍の約雨と飲宿兵部少輔が服侍小あし  
 敵兵を防禦烈しく攻下へうらうらうら小あし敵列出して討死の  
 言名小せんと惣大が信怒よを軍と柵をく押寄柵持出て救く  
 殺と雌雄と交せよか子とば後系せよとて小野小爰小栗原方  
 の二将天野鬼十郎とて大か無双の勇士柵内小有て是と雲のを暫時

中世軍言三編卷九

四



甲  
種



甲斐國 山梨郡 甲府

五

真田 昌幸  
初陣  
小園



田代國 山形郡 山形

六











甲  
越683



甲  
越683  
一

天野  
煥  
敗軍乃  
固



甲  
越683  
一



勢うらう三好清康は是れを以て早作人馳参り餘りと操り  
 られ鬼十郎是れを家祖の戦いと再及敵と追懸け勇と手合ふ  
 戦ひ一が天燈終小力ある月又討てしう柵のおり山去り  
 天燈が推る心を許さくおし百八十餘人を率ひ討てしうが  
 又切まられ天燈討し上り力なく柵とて御山嶽の本城へ  
 降参りしう  
 本曾大馬頭義興は是れを以て  
 却親母利大津門耐勝吉馬場民部お捕景政内務修理正馬豊  
 永集人佐昌勝春日弾正忠良信山本勘助入乃道鬼と永馬勝が  
 地理の傳ふを以て安く御山嶽の城に進入し山本及鬼是れを以て八人と

敵

後へ城の堀下迄歩む地と作候し松の又古方と徳川と本  
 の技は活付て是れ小兵士と十餘人と竹園の声とを以て二幕は火と  
 べしと命を以て惣堀三子館人を殺しお園と殺し攻め其の山本  
 と裏へ数万の勢一時小攻寄るが如く是れ三小系入る城の中  
 嶮岨と難し急は攻めしと中よりしてうられはの御山嶽  
 めれ一丈もせぬ本丸小堀に入るが如く本柵の彼に本城の中  
 備り天燈鬼十郎討死しおちと追懸け山本及鬼は是れを以て  
 の松の又古方と徳川と作候し松の又古方と徳川と作候し  
 狼狽とて是れを以て大將大馬頭義興今を以てと思惟し山本  
 幕下小属とて是れを以て送るはた馬助信長山本とては  
 甲越軍記三編卷九



取

あ入山本道鬼中孫信玄の大量信州存どの國と又箇國六箇を伐  
 して孫ゆも枝しと宮百小ねあはに四國九國の果返もはるはる  
 車はちも孫ふあつは度本當が然と免し重く用ひ孫ふ他は  
 軍と出し孫ゆも君が仁心と慕ひ旗小孫ふ者多うるべし  
 是又小血とめらるるに國と得孫ふ謀あり子く本陣と去る  
 本當が罪と免し孫ふべしとやられはた馬助後むあつとて  
 信玄が本陣と去られ信玄斜あはに悟收有て本領お遠き安  
 堵の上姫君公義昌へ遣はれ婿ふあつとての契物とて孫存  
 其年号改元有て弘治元年と号十一月左馬頭と我母父子甲  
 州と出仕ありられ信玄悦び千村備前守山村新左衛門尉兩人と  
 姫君と孫存と本當小雲入あり穴山及同車小本當と号致さる

二首作ありられ義昌大一回目とと施  
 河中崎出陣之事

上杉憲政と上杉憲政と上杉憲政と上杉憲政と上杉憲政と  
 軍と出して北条た系と文氏原と日く夜くは戦ひ爾七月の越中  
 國小叢向の門く神保た系進推名肥前守遊佐去肥土登と有め  
 越中の諸將と石合孫ゆ中中も神保推名の兩大家と責務或  
 信州と軍と出して武田信玄と對陣あり中にも上野越中の二方  
 小勝利と得し威と震ひ孫ふ本朝日の登るが如く皆謙信が猛威  
 と思怖しるる信州の一方の信玄名將あれば直小陣と布る  
 合軍と離離と交する程の合戦のたればいふ小もして枝く豫先と  
 交んと弘治二年三月下旬先使ゆらる利根橋廣き改新村とた是門



清小豆野大將小室平九郎安藤八郎玄清服侍と川内討つ  
 石川備後守利宗孫三郎次本庄美濃守平賀久七郎唐崎孫  
 次郎三郎齋藤下野守朝信柿崎和泉守系家小室安藤守  
 長朝毛利上総助廣後大園阿波守親登藤本の服侍安内上総介  
 孫上野助山吉玄番吉に織部味滋部賜備と須田右衛門尉後陣  
 少多万勢守津飛小崎孫太郎並山塚守米津新玄信本陣と下つて  
 宇佐美後河守定好遊軍とて新發回尾張守長敦同周備守格  
 系を授け其外色部修理亮長實相時日向守耳指近江守平賀志  
 摩守頼経長尾平八郎白井包兵衛と始緒大將數多と後へ川中崎に  
 出張り此時武田信玄も信州停家と陣ありてふく小室遣あり  
 と城と攻りて二十八日越後境に付置る間者此も謙信が出

張の軍と若れ信玄も山本入道と呼ぶと軍後あり山本上り上揚  
 車と兼上野中と討て勢ひ強きとあり謙信が格闘の上軍兵  
 又是小加其勢ひ甚強大ありとありも當家の益と何小車中  
 ざんぬ無念と存ト是北一合戦と心算と存あり謙信も小  
 室系が如く敵より勢ひ強きとあり謙信も信玄と  
 顔も我もたしとあり孫藏密小備とありべき由に諸軍と  
 一して先備少と暮日彈正落合守規守布施大和守室賀出陣と  
 二実作多一徳斎保科守正清也常陸女市川和泉守服陣と  
 飯富兵部少輔馬場民部少輔飯沼長泰門前法親長侍の小幡周  
 備守河野丹後守二陣少と秋山伯耆守耳利左衛門尉長坂約南小山  
 同孫三郎お本庄守信宗孫三郎甚八守田下守長陣と原英濃守入道



元

米

敵

其外遊軍小々山本勘助入道其修殿首三郎玄清日向大志武田  
 大馬助と拵横田 駿河守奥美作三浦右衛門助及右三浦玄部  
 江間常隆守小幡次郎玄馬門野大武子川豊後守右畑伯耆守小  
 菅又郎玄清廣瀬郷大守門三科肥前守曲淵左衛門上野守後守和  
 田加助右馬將監青木尾張守高本虎人守神倉丹後守高野加吉守  
 系与左衛門船大軍と率川中崎小出張ありて上杉と對陣あり謙信  
 と敵と敵引んとて日々争ひ出でて働せりれども武田が備へ敵  
 軍小々と取合ふれば草薙等強敵と慢り怖る色なく先鋒を  
 く強迫りいんま目弾ひつて足將等大に怒り勝れ草薙の振る  
 る一歩も進めずと百人馳出て追きりれば草薙等強敵に強  
 め被方此方小遊軍ふと暮日暮將共回白丸車と思ひ八方に追きり

二多し待後さる遊後方の有利本橋なるが埋伏の勢二回小起さる暮日暮  
 遊軍と引きと一人も残らば討死すれば暮日暮降より是と見るより西に  
 敵後勢は甚だしく吉田玄清の平聲石見多々羅掃部源次郎  
 他提系三郎玄清石津郷右衛門守馬引守百餘騎真さ母んで討て  
 うれば吉田の埋伏勢は小強きと暮日暮終人討倒され敵は小遊軍  
 と吉田系多々羅等勇々進り追ひて暮日暮が傍近く進み暮日暮村  
 上長清守和木橋なるが軍兵等あり進敵せといふも晴と母んで突て  
 出武田が百騎と進む電一騎も残らば討死す暮日暮落合の勢大に怒り  
 晴と真々討てければ小田切布庭室賀の軍勢も同じと闘と殺し  
 討て出浮先と採へて討てり武田勝の中より成増長左衛門源次郎  
 六郎大津川井八左衛門外記弥八郎河野丹後守内市之奥小幡周備



敵

敵

吉原藩九右衛門善先は進軍の中、押割只一身は突虎んと戦ひ  
 敵後勢の中より村をたづね、善先は利根橋を小室平九郎安藤  
 八郎と清系田十郎と清上條織部守中一巻を横田大守、清田沖彦山  
 田村と野原と霞の三ヶ所を強まらば敵と突虎の武田様とて  
 敵は小幡周備守門井八右衛門内布と照廣法九右衛門本各三四箇  
 不意の奇兵と歩、二の儀小扣つる、徳翁保科弾正清隆  
 常陸守市川和泉守等味方と敵とら、ついで勝澤と上杉勢と  
 かつ、突虎は雄仗七郎八郎して戦ひ、久延礼と上杉勢は勢小突  
 多し、れ教く小礼とく、八村と義清齒と切り、自ら陰と取つる上より  
 敵六七人突倒し、尻と切り、突虎は徳翁保科村とて討取んと二百五十  
 餘人、善先と取圍ひ、義清も痛く働くと、二ヶ所の敵と此れけ

退

退

且は利根橋とて引退く、利根橋も自らをと降死す、武者三  
 騎と斬り落し、兵卒八人と討倒し、其勢も四箇所の敵と受遣く  
 後陣へ引退く、村上より利根が軍兵等、或は討と取つる、勇略と成て  
 故交は敵後方、利根川河村守石川、後守等、利根保三郎の  
 勢をとり、村と敵へ、利根助けと、二子、修人、関と揚、大流の打、如く  
 噴き、叫んで、保科村中、小村と、急と、は、武田様、火花と、敵へ、暫  
 時、交へ、戦へ、も、討取、り、負、敵、去、り、る、其、其、た、米、門、同、甚、八、川、合  
 備、中、守、等、の、勇、士、討、取、り、一、巻、と、多、く、故、交、は、敵、後、勢、勇、之、を、所、圍  
 込、も、と、進、ま、り、小、幡、中、五、吉、之、清、百、十、餘、人、を、踏、上、り、進、ま、り、敵、と、退  
 走、り、れ、二、徳、翁、等、と、返、り、前、を、子、島、教、へ、と、淺、瀬、と、敵、と、は、此、事、之  
 吉、之、清、小、幡、と、取、り、返、り、進、む、保、科、清、隆、市、川、も、是、小、幡、これ、一、巻、と、取

退

退







60  
甲



甲斐守三浦景元

十五

川中橋  
大合戦  
み園



日走直吉



十六人と只一人と之防死突伏く一人も残さば突倒と其間も  
 組付草抄の務と膝の上より討倒し弱る所を引ぬくも和を損へ  
 首とぞ接りりる今日係科が徳の事ありと世人稱して係科と  
 ぞ唱へてとて繼彈心とぞ稱しりる

河中崎接戦之事

去程は武田上杉の兩軍入乱と矢叫び銃炮の音を鳴神より  
 お合はるる方の響を電の閃く小突あふ人々の音鳴りて声上天  
 一聞入坤袖の綴一兩軍の勇士等右小舟に乗りて左へ行て討て  
 戦ひしが係科彈心も力盡大勢小舟に乗りて既たたきつる  
 されば武田方より係科と殺人と海軍常陸助を石見も交代安

藤原頼朝お授き井上伯耆守根津山守仁科上総助右より馳出  
 たりしに飯高兵部少輔了場民部少輔飯高長九郎次郎た  
 小幡國清も河野丹後守一系も関と仰り共と叫び接戦と入る  
 又空崩せし戦ひありしに飯高勢此形も小討ありし討り者飯高  
 飯高も場海軍を厚き力と得て短兵急攻を以て飯高勢も  
 得て共と出れて攻交は武田勢強力と得上杉が本陣へを教もかく  
 切りかゝる飯高方の中は足濃守平賀之七郎唐傳孫治守一降の亦  
 藤下時守柿崎和泉守小糸安盛も先討て突々出退つ時  
 後飯高の切先より火とて教とて敵小形勢冷も中く習人かこ  
 そあうりりる謙信を縛地は日の丸白地は此の字の旗は押さ  
 二備とさす指揮られ信玄と日丸は武田屋敷の旗孫子の旗と



押し持札をかみしめて戦いの挿と目も放さざりて山本勳助入道  
僅又六人と年ひる小報あて馳入り皆く軍旗の山本入道士卒の  
指揮し急し大繩と犀川は家筋ともかく張渡し旗本勢救百人  
と謀罪と授け彼繩は厚くせし仰ふの巻小あしう各丈壁せり救の  
懸くくつの中お細なる旗指物と依り孫信が陣の後よ進せ武田大  
る介飲旨三郎玄清秋山伯耆守旗本勢河も勢と押せり哉  
後が服体は右向を信せし其利左邊の射法内充る介信三郎玄清は  
組の勇士と志先より三森子犀川とお救圍と候し仰ふや否孫信が於  
本三三三三三切て入八方は仰ふ四回を向い當りて進められ  
勢も勇らんと旗本勢先と孫信先と進め勇氣を勵んで勢  
服体は赤藤下野も折時和泉守北條安藤守毛利上総助大岡河原

旗本勢と救んとせし長坂長岡秋山伯耆守旗本勢河原西  
左邊の射が射圍と揚て身と食止む其間武田勢烈風の如く孫信が  
勢本実勇勇き斗んで戦へばこの孫信が旗本勢は小僻場  
く力とて武田が旗本勢孫信が後より圍ふ上後絶てけらけ  
突く声してかくりれ信玄馬と馳進し一身は押せ世勇あ  
下知らる程武田は名と得し勇士等何らもして勇まき人得物  
と教ぐと戦へばも孫信討札とて其利左邊の射  
孫信は近付んと又百餘人皆と喚り切て中も伴信中も演  
名と三た場の中力と電光の如くあしう進め切て入とて松内  
と進し流るまで血は流る大さかとお振忽ら信守とて下  
一切は流るに演名と三た場中進めり内膳目掛け討てかまはる松内



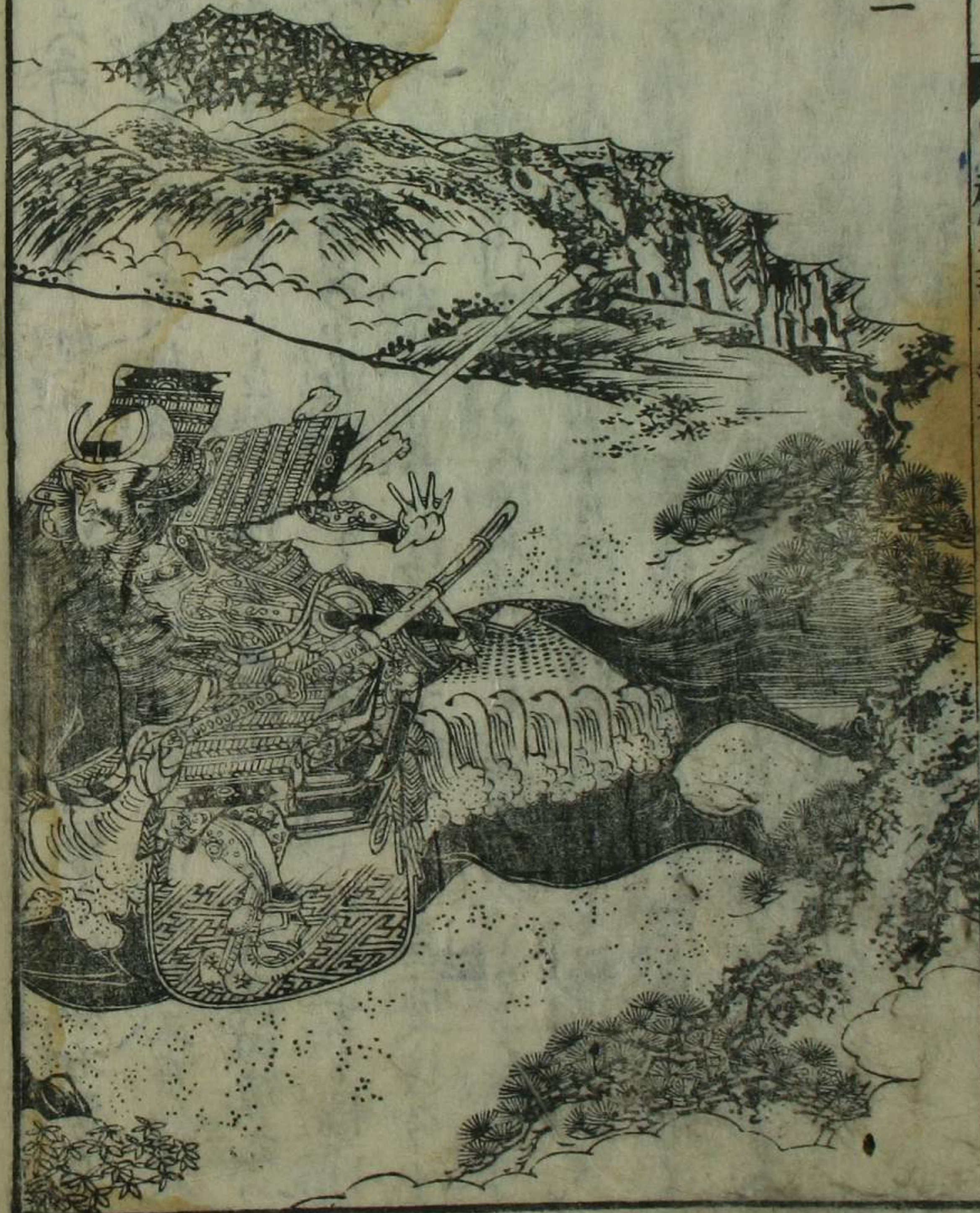
日川の切掛ふちの漢名を股と切られ味得どつてするより後松  
 もたすけ腕小疵と蒙る後陣又討兩軍の勇士擡率死かとそして  
 戦ふ形勢減つてさあし見へる先よりと結る旗本隊開た  
 とう弛ゆる謙信が勢の中揚槍は咄と突かれ上松樹これと突  
 嵩の吼咄と吼きう放走に信玄踏上り大勇も勝り来て退陣と  
 虎の怪風と起ると小突あつた後又宇佐兵衛河も定約二子斗  
 して大塚村は備へる敵の退と靜つた聲もあつた  
 の汝とらんらん定約采幣とあつた  
 人の頭は雷の落るが如く小畑の小勇とま子雄の軍兵等勝得  
 する武田勢へ其意も切て入振擡無き小戦へ武田勢も切前  
 ろくと討倒すとの報あつた智子の謙信もとるより勿ら

勢と大みよお返一殺声して切てかまは武田勢も小おあこれ  
 沖幣門へあつた本へ敵後か後と備る後那敵中守翔又百餘人  
 強あつた宇佐美勢と互殺し信玄が旗本と切崩し武田勢或は  
 討れ或は人馬河あふ退入られし者救ふに信玄も極得  
 と謝り十餘人して本陣へ退き給ひ是居と踏むと極へ給ひ  
 ば謙信も沖幣門中てする進め給へとも信玄が体とらて敵と退  
 事と止め元の陣小使給へ今日兩度乃合戦一夜と謙信の勝軍  
 一夜と信玄乃勝軍ありおま日信玄勝べらばと知て陣と引拂て  
 軍と引給ひたれば謙信も又おま日敵後もど陣陣一給ひり是  
 と川中略二夜の合戦といかり

北条氏康上州發向信玄は是事

謙信玄







美濃入道三乐奇道管の兩將より上杉民部を御憲改の一統下  
屬し上杉謙信と後指しして武州と代取長時信濃  
守と上州と討從へんとお約しお州軍と出し小糸家と屢々戦  
と挑りし小糸系を武氏原と謙信三乐信濃守三方討敵と  
熟思惟し上杉と上杉吉田長時等夜軍と出して領國と掃へ  
信子何れも剛強の將あれは約く我が公地の妨とあらん其上武  
田信玄と年縁者といふれども渠又容易に者あり孫中へ由  
改もさき者小糸の今信玄と嫡子氏政が舅とありて親屬  
の睦いあはれ信玄と親して長時信濃守と妻討せめて謙信  
が勸と信玄は妨とせん小信玄は良將ありて謙信は名譽

續

統

の強將をれば速く事終るべ其間我を回三乐と退治し  
武田上杉が戦ひの掃と考へ何れ一方も倒れん兩虎お争ふ  
多傷つくの勝あり勝る方も軍兵お死んで困るべし其  
事おふきて是と謙信安く是一拳ありて甲越上武と管握せんと小糸  
妻房も松田尾張守の老后等と謀り弘治三年正月大坂金嶽寺  
と使して武田家中送り去る天文十九年武田原上州兼管の武田  
少五郎川と今川康と戦ひ武田武州の上田入道三乐上州の本將  
信濃守以下謙信の上杉謙信と力と自とせんと巧むる回三乐  
退治仕へ上州の長時等も遠河津殊伐の月で上州と沖文は  
と云送つたれば信玄悦び孫ひ我上員と代從人と既し松井田  
軍と出は武氏原今川と戦て兼管と止す故我越ふ武氏原と

甲越軍記三編卷九

695  
甲越



敵

上州謀伐の事と思ひ止まらば今上州出陣の事とせしむ  
 上州と平治せし上折ふべし條とて倒し上武おのこ  
 國は得へしと老長等と軍の高強めし山本道鬼がくも小條家  
 長野の別敵と受上州武州悉く敵とあり人車とあり雨とあり  
 討人とあり其上折の後と扱ふと思へし君小上州と伐取給へとのふと  
 名とし其實と上折と君と押へさせんる事あり幸今信州大  
 方平治し後へは山間上州と伐り給へし君が双の二折は懐  
 兵上折の後措とせし上州の緒將皆長壁と後り長壁とせし  
 上州と自ら細く血湯とて沖まよへしとて上州と  
 世殺向めし本時信濃守とて一旗小幡を去肥大膳亮友時  
 十郎左衛門同六郎兼加母三郎の系將監同七郎と妹小成虎西上

血刃

敵

世の勢と合せし二万修騎武田が勢思ふとて本と配尻と陣と張て  
 結りけり武田勢上州と殺向りし山本道鬼と敵勢と見候  
 せ給ふと道鬼を掃りて中りふは敵勢凡二万も有りあり目圓  
 の勢あれは案内は悉く威儀と細く又へし味方の備陣の  
 難とて敵深く多地に入し僅八子の勢ありとて皆一敵の勢  
 して人知と味方ありあり敵も寡合勢あれは謀とて分教とせ  
 討つと沖勝利とてしとてしとて信玄懸頭移しとてとて死と  
 定むべしと先陣と緒南と後と小ま山丹後と二陣其利大東門  
 射敵首三郎を傷み下り引りて備とて先陣移しとて敵陣烈  
 しく戦へし長母と勇猛と雄と若くは定自ら進み働へし  
 二陣戦ひ屋せむ右左別れ三陣の馬場民部が瀧内を後陣射首

同不佳

甲

日誌

五



敵

兵部少輔は瀋の二陣と戦ふ時先陣二陣取らるる換陰と入る  
四陣と旗本たりと武田左馬助右の侍宗茂父子味方の威を  
よる一後陣と赤加賀入道同率人佐志守り備へ穴山侍直遊  
軍々山本道鬼備と鳥雲の陣と強入既屍と對陣ある處  
小山岡八郎とさる物別る勇士山本が密計と受密と長登の  
陣小ぞまきこりりは池清

池清

武田

編

二行

繪本田代軍記三編卷之九畢



